

---

# 異形の守り人

イデオン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異形の守り人

### 【Nコード】

N6838P

### 【作者名】

イデオン

### 【あらすじ】

気が付くと俺は森に居て、自分が誰だか分からなかった。そして俺は……『バケモノ』だった

## 1話

（序章）

気が付いて最初に感じたのは熱さだった。

体中が熱い・・・痛い・・・

痛みを堪えて周りを見渡してみると、木々が確認できる。どうやら

ここは森の中らしい・・・でも何故森の中に？

・・・そもそも俺は誰だ？

何も分からない、何故ここに居るのか・・・この熱さは何なのか・・・

そして気付く、気付いてしまう・・・恐らく4〜5mほどと思われる周りの木を、何故か俺は見下ろしていた。

何故だ・・・俺は巨人なのか？

そして頭に思わず頭に手をやろうと自分の右腕を上げた。しかし、俺の目に入ってきた『ソレ』は右手なんかじゃなかった。

肉

そう表すのが一番適切だろう・・・眼前に上がってきた『ソレ』は唯の肉の塊だった。指もひじの関節もない唯の肉・・・。

「う・・・ア・・・？」

思わず声を出してしまう。

・・・いや声なんかじゃなかった。

ただ息を吐くついでに出てきてしまったような掠れた音・・・。

「い・・・ギ・・・！」

なんだこの肉塊は！？しかも声が・・・。

何とか『声』を出そうとしてみるが、口から出てくるのは相変わらず掠れた音・・・。

何なんだこれはどうなってるんだなんだなんだなんだなんだなんだなんだなんだ！！！！！！

訳が分からない。気が付けば森の中。自分が誰だか分からない。声も出ない。自分の右腕は肉塊に・・・肉塊？

ふと、嫌な予感が頭をよぎる。この肉塊は、右腕だけなのか？

思わず視線を下げる。

『体』はあった・・・右腕と同じような肉塊が・・・。

それは5mほどの肉塊、赤黒く血管が浮かんでいて脈を打っている・・・それが俺の下半身となっていた。上半身はその肉塊のてっぺんに生えている。

しかし、上半身は辛うじて人の形を残しているだけで、その全てが右腕と同じような歪な肉塊となっていた・・・。

そう・・・俺はもう人とは呼べないような『バケモノ』になっていたのだ・・・。



警備を学園の魔法先生と魔法生徒で行っているようだ。

・・・私も使命の為に、この警備に参加する事となり今日が初警備となる。

「実戦は経験済みなんだけどね・・・」

隣に立っている龍宮が呟く・・・目の前の魔法先生には聞こえないくらいの声だったが私には聞こえてしまった。まさか同室の龍宮が魔法生徒だとは思わなかった・・・どうやら厳密には魔法生徒ではないようだが、その所はよく分からない。この警備には見た感じ善意で参加したとは思えない。仕方ないからやるか・・・といった感じだ。

「準備は終わりました。問題ありません」

私はそう答え、愛刀・夕凧を強く握りしめた。

それにしても、最近は侵入者など滅多に居ないと聞いていたのに、まさか警備初日で出くわすとは・・・運がいいのか悪いのか。だが、私は守らねばならない人がいる・・・その為にはどんな事でもやっつける。

「初日から侵入者とは災難だね・・・でも僕も付いて行くから心配しなくていいよ」

私と同じ事を思っていたのか、30代くらいの髭が似合う男が話しかけてくる。この人は私たち1-Aの担任でもある高畑先生。相当凄腕の魔法先生らしい。

「まあ我々がいれば滅多な事は起きないでしょう」

そう自信たっぷりに言うのは黒人のガンドルフィーニ先生。この人も中々強そうだ。

今回はこの4人で侵入者を排除しに行くようだ。各々の獲物から推測するとスナイパーライフルの龍宮が後衛、銃とナイフを使うガンドルフィーニ先生が前衛と中衛、刀を使う私と恐らく拳をつかう高畑先生が前衛と、中々バランスがいいチームとなった。

「では行きましょう。恐らく相手は一人らしいのですが、ちょっとおかしな事がありましたね・・・」

私たちは目的地である西の森に向かいながら高畑先生の声に耳を傾ける。

「おかしな事ですか？」

「ええ・・・反応は一つだけなので恐らく敵は一人だと思われるんですが・・・その侵入者はいきなりそこに現れたらしいです。しかもそこから動いていない・・・今この時も」

高畑先生とガンドルフィーニ先生の話を聞きながら、その侵入者について考える。

侵入してきたのに動かない？侵入者の目的はその西の森だったという事か？しかし西の森には特に何もなかったと思うが・・・。

「それは確かに変ですね・・・しかもいきなり現れたという事は転移魔法なのでしょうが、学園の結界は真帆良の外から中への転移も防ぐはずです・・・結界をすり抜けて転移出来るような手練が、ずっと転移先で動かないなんて事は・・・」

ここ真帆良学園は侵入者が侵入してきたら、結界の維持を行っている魔法関係者がそれを察知して、学園長に報告するらしいのだが・・・

・その侵入者の探知魔法というのは結界にのみ構築されているらしい。結界を強引に突破した者に作用し、その情報を伝える魔法らしい。確かに真帆良に侵入するには結界を通らなければならぬので、その方が効率がいい。

しかしその方法だと今回のように結界の魔法を反応させずにすり抜けてきた者に対しては効果がない、その為私たちのような見回り部隊が居るのである。

しかし今回のように対象がずっとその場から動かないというのは異常だろう。普通侵入者は、速やかに目標を達成する為に行動するはずなのだから。

「もしかして、その森で何かしているのではないですか？召喚術の準備とか・・・」

私は高畑先生に尋ねてみる。

関西呪術協会はその名の通り呪術の使い手が多い。その呪術の中に契約した魔物を召喚する技がある。呼び出せる魔物の数と強さには召喚主の力量によって決まるが、もし召喚の準備だとしたら厄介な事になるかもしれない・・・今は敵が一人でもいきなりそれが百人になるのかもしれないからだ。

しかし高畑先生は私に安心させるためか笑顔で否定した。

「いや召喚の準備をしている様子ではないらしい。召喚の魔法陣には魔力を通さなくちゃいけないけど、対象の魔力は減っていない・・・つまり本当に何もしていないんだよ。少なくとも魔法の関係している行為はね」

「そうですか・・・」

そうなるとうますますおかしい。侵入者は何のために侵入してきたのだろうか？ただの偵察？それなら楽にのだが・・・

色々と考えていると先頭を走っていたガンドルフィーニ先生からそろそろ目的地だと言われる。

「そろそろ反応のあった西の森です・・・！ これはすごい、何て魔力だ・・・！」

言われてみると確かに周りに魔力を感じる。私は魔法はあまり詳しくないのでぼんやりとしか分からないが、ふと龍宮を見てみると先ほどまでの面倒くさそうな顔から引き締まった顔になっている。

これは勘だが・・・恐らく龍宮は私より強い・・・ような気がする。そうなるとこの中では私が一番弱いという事になる。

私はみんなの足を引っ張るまいと、再度気を引き締めると夕凧の握りを確かめた。

「そろそろ敵の居る場所だよ。もし相手が異形の者でも驚かないでね？」

高畑先生に注意されるがそれは大丈夫だろう。私も半分『ソレ』なのだから・・・

そう思っていた私はバカだった。そこに居たのは。

「ナ　　んだ　　？　　ゴれ　　は？」

あの悲鳴が原因だったのかは分からないが少しずつ声が出せるようになっていった。

それでもまだ掠れ声だが・・・。  
まだ体中は熱いままだ。そして断続的に刺すような痛みが体中を襲っている。

この体に驚いていて痛みを忘れていたのか、落ち着くと痛みがぶり返してきた。

痛い・・・いたい・・・イタイイタイイタイ・・・

これは夢だ・・・そう思っても現実に俺はこんな『バケモノ』になつてここに居る。そもそも俺は俺が誰なのか分からないのだ。どうやってここに来たのか？どうしてこんな姿になっているのか？何も分からない・・・

しかしこれだけは分かる・・・俺はニンゲンじゃない。

怖い、痛い、熱い・・・様々な感情が駆け巡る。

「うあああ・・・うう」

口からは嗚咽しか出ない。腕には手もなく関節もない唯の肉で、下半身は巨大な肉塊で動く事も出来ない。

まるで子供の作った粘土細工だ。巨大な粘土の塊に、人型の粘土を突き立てる。そうすれば俺の完成だ・・・。

こんな状況なのに笑えてくる。絶望しかない笑いだが、無いよりマシだ・・・。

俺は手の無い腕で顔を覆う。もう何も見たくなかった。この体を・  
・現実を・・・。

だから彼らの到来に気付けなかったのだ。

「なん・・・だ・・・？ 『コレ』は」

そんな声が聞こえて初めて、俺は彼らの存在に気が付いたのであつた。

俺の正面方向・・・10mほど離れたところに彼らは居た。無精髭のおっさん、黒人の男、髪をサイドで括った女の子、長身で褐色の肌の女の子。彼らは茫然と俺の方を見ている。その顔にはありありと恐怖と困惑が浮かんでいる。

しかし俺にはそんな事はどうでもよかった。人が居た！これは俺にとって希望の光に見えた。助けてもらえる！そう思って俺は声をかけようとした。

「タ　　す　　け

ダァー！ー！ー！

轟音が響く。と同時に体に衝撃を感じる。

「　　え　　？」

見ると、彼らの中で先頭に立っていた男が銃らしきものをこちらに向けていた。そしてその銃口からは煙が出ている。

・・・俺は・・・撃たれたのか・・・？　どうして？　助けてもら

いたかっただけなのに・・・

どうして・・・？

どうしてどうしてどうしてどうしてどうしてイタイイタイイタイイタイイタイ

そこにいたのは赤黒い何かだった。

この地点に近づくにつれて気温がどんどん上がって行って不思議に思っていたのだがその原因が分かった。あの赤黒い塊が非常に高温となっており、この辺りの気温を上げているのだ。まわりの木々はまだ四月だというのに干からびていた。枯れているのではなく、葉っぱも緑の色を保ったまま干からびているのである。

そしてその原因と思われるモノを見てみる。

5mほどの赤黒い塊・・・よく見てみれば血管が浮き出ており時折脈を打っている事から生きているのだと思う・・・。

アレから10mほど離れて立ち止まってしまった私たちは茫然としていた。あれは何なのか？どうやってきたのか？どうしていいのかわからなかった。

「なん・・・だ・・・？ 『コレ』は

ガンドルフィーニ先生が呻くように言った。高畑先生と龍宮の顔には恐怖と困惑がはつきりと浮かんでいた。きっと私も同じような顔をしているだろう。

そこで塊の上部で動きがあった。塊は若干縦長な形をしていると思っ  
ていたが、よく見ると下の丸い塊の上に人くらいの大きさの『何か』  
が乗っかっているものと分かった。その『何か』が動いたのだ。

・・・それは人だった。例えるなら粘土で作った歪な人形・・・それが腕のようなもので顔を覆っていたため、人の形をしていると分からなかったのだ。ガンドルフィーニ先生の声が聞こえたようであり、こちらに視線を向けて来た。その顔にはちゃんと目と鼻と口があるが、目には瞼がなく丸い目玉がこちらを向く。

「ひっ・・・」

思わず情けない声を上げてしまう。単純に怖かった。得体のしれないアレが怖かった。

そしてアレが口を開けて何かを言ってきた。

「タ　　す　　け

」

「ダアーーーーーン!!!!」

しかしその声は私たちに届く前に銃声によりかき消されてしまった。見てみれば、先頭に居たガンドルフィーニ先生が銃を構えていた。

「ガンドルフィーニ先生!？」

高畑先生が非難の声を上げる。しかしガンドルフィーニ先生ははつきりと返す。

「アレが何かは分かりませんが、学園に有害なものであるのは明らか

かです！！ならば先手を打って倒してしまいます！！」

そう答えると続けて銃を撃つ。

その全てがアレに当たったが見た所傷が付いている様子はない。

「効いていない！？」

「恐らく、奴の体温でしょう。見た所奴は相当体温が高いらしい、その為に銃弾では当たると瞬間に溶けてしまうのでは？」

銃弾を溶かすほどの体温を持っているなんて・・・一体あれは何なんだ？

ガンドルフィーニ先生の攻撃が通じていないといっても感覚はあるようで嫌そうにその巨体を揺すっていた。

「ちい！　じゃあナイフも無理ですね・・・なら魔法で！！」

ガンドルフィーニ先生はそう言うすぐさま詠唱を開始した。西洋魔術特有のキーを唱え、その後で呪文のスペルを唱えていく。そして同じように戦闘態勢を取った高畑先生は私たちに言った。

「君たち二人の武器では対抗できない！　アイツは僕とガンドルフィーニ先生で対処するから君たちはここにいなさい！」

「し、しかしそれでは危険では　」

反論しようとした所で龍宮に肩を掴まれた。振り返ってみると龍宮は静かに首を振った。

「私はこの銃のみ、お前はその刀のみ・・・これでは私たちは確かに足手まといだ」

確かに私の戦闘はこの夕凧を使った京都神鳴流剣術。銃弾も溶かすような相手に切り込めば、いくら夕凧といっても溶けてしまっただろう。

ここは先生方に任せるしかないのか・・・

その時、アレが何かを言っているのが聞こえた。今度は銃声も無かったため、こちらまでその声は届いた。

「タス　　テ　　くれ・・・・・・・・」

「えっ・・・・・・・・？」

助けて・・・・・・・・くれ？　もしかしてアレは・・・・・・・・いや『彼』は・・・

「“雷の暴風”」

とたん、ガンドルフィーニ先生の呪文が完成したのか魔法を彼に向かって放つ。

「待ってくださいガンドルフィーニ先生！　彼は何か言って

」

私の声は魔法の音でかき消されて聞こえなくなってしまった。そして、魔法は彼に向かってまっすぐ向かい　　直撃した。

イタイ・・・アツイ・・・

あの黒人の男に撃たれたがこの体に傷がついた様子はなかった。しかしそれでも当たった所からは激しい痛みを感じる。

どうして撃ってくるんだ・・・助けてほしいだけなのに・・・タスケテくれ・・・。

「タスケ　　テ　　くれ・・・。」

痛みを堪えてもう一度言う。助けてくれ助けてくれ助けてくれ助けてくれ助けてくれ！！

しかし返事は激しい音と光だった。その光は俺に向かって突き進み、下半身の肉塊にぶち当たった。

「あああああああああがががあああああああああああ  
あああ！！！！！！」

痛みで叫ぶ。今までの熱さや銃の比ではなかった。下半身を見てみると肉塊が半分ほど抉れていた。傷口からは赤い血が勢いよく流れ出す。

ああ良かった・・・こんな体になっても俺の血は赤いのか・・・と少し嬉しくなる。しかし痛みはもっと激しくなる。目も霞んで来た。痛い・・・苦しい・・・死にたくない・・・助けて・・・

「シニ　　た　　くな　　イ　　・・・。」

声を振り絞る。俺にはこれしかできないのだから・・・でもその声は届かない。帰ってくるのは無慈悲な攻撃だけだ。

「豪殺・居合い拳」

無精髭の男がそう叫ぶと何かとてつもなく大きな衝撃が俺を襲う。そして下半身の残り半分も吹き飛ばされた。

「・・・イタイ・・・タスケテ・・・シニタクナイ」

もう叫び声も出ない。出るのは命乞いだけ。

ドモらずに声が出せても、相手は聞いてくれない・・・下半身を無くした俺は上半身のみで地面に転がった。もう痛みは感じない、おそらくもう死ぬのだろう。なぜかこの状態になって初めて冷静になつてきた。

でももう意味がないか・・・もうすぐ死ぬんだから・・・

ああ星空が見える・・・綺麗だなあ・・・

その星空に二人の男が被る。俺を攻撃してきた二人だ。

「・・・・・・助けて」

情けないなあ俺って。こんな状態でも命乞いかよ。もう無意味なのにさ・・・。

ああ目が霞む・・・空が見えない・・・何も見えない・・・

ああ・・・暗いなあ・・・

「・・・・・・すまない」

ゴチャッ！

こうして『バケモノ』は死んだ。

私は先生方の“虐殺”を遠くで見ている事しかできなかつた。隣に居る刹那は途中から腰をつき、目を瞑り両手で耳をふさいで「やめて・・・やめてよ」と呟いている。

私も出来ればそうしたい・・・先生の攻撃が当たるたびに「シニタクナイ・・・タスケテ・・・」と言っている彼を直視するのはキツイ・・・。

まるで無抵抗の民間人を虐殺している気分だ・・・。しかも最初は分かりずらかつた言葉も、どんどん聞き取りやすくなってきている。

・・・吐きそうだ。いくつも戦場を渡ってきたがあんなに悲壮な声を聞いたのは初めてだった。それにあの目・・・最初に私たちを見つけた時の目は敵を見る目ではなく、希望に満ちた目だった。誰かが助けにきてくれたと、希望の光を見つけた目だった。それがいまでは絶望しか読み取れない・・・。

ふと、顔に何か伝う感触があつた。手で触ってみるとそれは涙だった。

泣いている？ 私か？

「まさか・・・」

思わず声に出してしまう。『あの時』から泣く事なんて無かつたの

に……。

彼を見てみるともうあの大きかった肉塊は消えており、上半身のみとなっていた。そして仰向けに転がる彼を高畑先生が居合い拳で

「やめっ

」

ごちゃっ!!

……潰した

こうして、私と刹那の最悪な初警備が終わったのである。

……最悪な仕事だった。

僕は今日、最低な事をしたんだ。見た目が異形とはいっても、無抵抗な彼を殺したのだ。いまだに彼の最後の言葉が耳から離れない。

本当なら保護するべきだったのだろう……しかし、周りの地面もマグマに近い状態にするような体温を持っているのに、どうやって保護すればいいのだろうか？それにあの姿かたちでは……。

ここ真帆良の魔法関係者は侵入者が異形な者をよく仕向けてくるため。異形＝敵という認識が強い。そんな彼らに保護の同意を得ようというのは無理な話だろう。侵入者で異形……倒してしまえばいいという意見がほとんどのはずだ。

なら僕がその罪を被る。・・・許される事ではないけれど、僕はこの罪を死ぬまで背負おう・・・。  
それで許してくれ・・・。  
そうやって僕は名前も知らない彼に謝罪するのだった。当然、気分が晴れるわけもないが・・・。

どうやらボーっとしていたらしい。  
私は気が付いたら龍宮に肩を支えられて歩いていた。

「気が付いたか？」

それに気付いたらしい龍宮が声をかけてくる。何故か龍宮の目が赤かったがそれは気にしないでおく。

「ああ・・・すまない」

そういつて一人で立つ。ふらつく事も無いので大丈夫だろう。前には高畑先生とガンドルフィーニ先生がこっちを心配そうに見ている。

「すみません。もう大丈夫です」

そういつて頭を下げる。警備初日なのにとんだ失態だった・・・。

「いや・・・謝るのは僕の方だよ。二人とも、嫌なものを見せてしまったね。すまなかった」

そう言っただ高畑先生も頭を下げる。  
そして、先ほどの出来事が脳裏に蘇る。助けを請う彼・・・それを聞きながら殺した先生たち・・・仕方ない事は分かっている、やりきれないものがあった。  
だからせめて・・・

「あの・・・ちょっと寄っていききたい所があるのでここで解散してもいいですか？」

「？ もう夜も遅いのに行くんだ？」

ガンドルフイーニ先生が咎めてくる。それはそうだろう。彼は魔法使いであると同時に教師なのだから。でも理由は言えない、言いたくない。

「いえ、ちょっと・・・」

言葉を濁すしかなかった。本当は今日でなくてもいいんだろうけど、どうしても今日行っておきたかった。

ガンドルフイーニ先生は咎めようと口を開くが高畑先生によって遮られる。そして高畑先生は

「いいよ。行っておいで」

と笑って言った。

ガンドルフイーニ先生も諦めたように「まあ・・・高畑先生がそう言っなら」と咎めるのをやめてくれた。

「心配なので私も付いていきます。ちょうど同室ですし」

と横から口を出してきた。

こうして何故か龍宮が付いてくる事になったが断るわけにも行かず先生方と別れる。

「あの・・・龍宮・・・悪いんだが・・・」

「供養だろ？」

・・・見抜かれてしまった。スナイパーなだけあって、相手を観察するのに慣れているのだろうか？

「・・・そうだ、別にお前は来なくても」

「私も行く」

・・・今度はきつぱりと言ってきた。まあいいけど・・・  
と思っただら龍宮はしゃがみこんで何かをしていた。

「龍宮？」

「供養なら花が居るだろう？」

そついう龍宮の手には白い花が握られていた。そして私にも何本か渡してくる。

私たちはあの場所へ向かう。彼が死んだあの場所へ。

「・・・彼は何だったんだろうな」

「・・・さあな。でも敵ではなかった、そんな気がする」

私の問いも答えを期待して聞いたわけではなかった。ただ理由が欲しかった。言い訳が欲しかった。彼を殺した理由が。こんなことを

考える自分が嫌になる……。

気分が落ち込んで若干下を向いていたせいか、前を歩く龍宮が立ち止まった事に気付かず、その背中に頭をぶつけてしまった。

「いたっ おいどうした龍宮……龍宮？」

龍宮はなぜか茫然としている。あの場所はすぐそこのはずだ。

……何かあるのか？

背の高い龍宮の横から顔を出してあの場所を見る。

……そこには

## 2話

俺は何をしているのだろう

確かあの男たちに攻撃されて・・・頭を潰されて、死んだはずだ。

でも今俺はどこかに寝かされていて体中の激痛により動けないでいる。目も開かないような激痛である。

痛みを感じるといふ事は生きているのか？頭を潰されても生きてるとか・・・ますますもって『バケモノ』だな・・・。

そんな事を考えていたら、誰かが部屋で話しているのが聞こえる。目が開かないので誰が話しているのは確認できないが・・・。

「すまない龍宮・・・色々用意してもらって・・・」

「構わないよ 私がやりたいからやったまでだしね。」

・・・？ 女の子が二人？ 声だけじゃよく分からないな・・・。目はもう諦めて、声を出そうとしてみるがなんと口も開かない事に気が付いてしまった・・・。口も目と同じように開けようとすると筋肉が悲鳴を上げる。

どうやら俺は重度の筋肉痛になっているらしい。

「いいのか？ 勝手に部屋を改造したりして・・・」

「構わないさ いいんちよだつて部屋を改造してるじゃないか。

私たちがやってはいけないうんて事はない」

「まあそうなんだが・・・」

二人の少女の会話を聞いていたら、眠気が俺を襲ってきた。やはり

まだ本調子ではないらしい。今自分の置かれている状況を確認したかったが目も口も開かないのであれば何もできない。ここは大人しく眠気に身を任せるとしよう……。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

あの後、彼の供養の為に彼を殺した場所に赴いた私たちは、そこであるものを……いや、ある『人』を見つけた。

高畑先生が彼にとどめを刺した所に、一人の男が倒れていた。その男は恐らく私たちよりも年上……高校生くらいだろうか？ 白い長髪を地面に広げ、何も身につけてはいなかった。

龍宮は私より最初に彼を見つけて立ち止まっていたのだろう。私も彼を見つけた時はしばらく動けなかった。

ふと我に返ると同時に彼について考えた。彼は誰なのだろう……？

……いや、本当は考えなくても分かっていた。彼はアレなのだ。

あの肉塊……死ぬまで私たちに助けを請いながらも、殺されてしまった彼。

あの肉塊の面影は全く残ってはいないが、何故か私はこの男性があの肉塊の人物と同一であると分かった……。

気が付くと、私の前に居たはずの龍宮が彼に歩み寄っていた。慌てて私も彼に近寄る。彼の周りの地面はまるでマグマが固まった後のように黒く硬質化していた。やはり彼は相当高温を発していたようである。

しかし今の彼はあの異形な形とは全く違う。髪の色は少々異質だが、まあ普通の青年といった感じだ。・・・全裸だけど。

目のやりように困るので、とりあえず制服の上に着ていたカーディガンを彼に掛ける。

「龍宮・・・顔が赤いぞ？ 熱でもあるのか？」

「お前こそ赤くなってるぞ？ 寒いのか？」

お互い同じだったわけだ・・・。

「しかしこの状況・・・どうしたらいいと思う？ 龍宮？」

「・・・まず確認したいのだが、この人はアレって事でいいのか？」

無言で龍宮にうなずく。

恐らくそうだと思う。さっきまで戦闘があつたこの場所にたまたま戦闘後に全裸で現れてこの場所で気を失っているなどありえないだろう。

それだったら、この青年が何らかの原因であの異形のモノになつてしまい、先生方に倒された事でこの姿に戻つた・・・と考える方が妥当である。

しかし、そうなるさっきまで苦しかった胸がもっと苦しくなる・・・私たちはこの人を見殺しにしたんだ・・・死んではいけないけれど、そんなことは関係ないだろう。

私たちはこの青年の助けを拒み、殺されるのを見ている事しかできなかつたのだから・・・。

「だとすれば・・・どうする？ 先生方に報告するか？」  
「・・・いや止めておこう 今は人だけど元が異形の者を学園が認めるとは思えない・・・殺されはしないだろうけど、いい扱いを受けるとは思わない」

帰りの道中も苦々しい顔をしていた高畑先生なら擁護してくれそうだが、当事者にはあの頭の固そうなガンドルフィーニ先生もいる。何かを後悔しているような高畑先生の横で、手柄を立てられた！とでも言いたそうなやり遂げた感のある顔をしていたし・・・しかもあの先生はそこそこの地位の高い存在らしい。あの人抜きでこの状況をどうにかするのは難しいだろう・・・。  
だとしたら取れる方法はそんなに多くない・・・。

「・・・龍宮、一つ頼みが  
「いいよ」

「・・・あっさりと肯定。いやまだ何も言っていないのだけど・・・  
「言わなくても分かるよ。彼を匿うんだろ？ 私たちの部屋で」

「・・・スナイパーって相手の心も読めるのか？」

「読めないよ」

「・・・読んでるじゃん。」

「顔で分かるよ、ばつちり出てる」

ふと顔に手をやり表情を確認してみる・・・が、いつもの私の顔だ。

「ふふふ・・・」

「・・・何がおかしい」

「いや別に」

まったく・・・。

「それで、どうするんだ？ このまま連れて帰るのか？」

「いや、一応認識障害の魔法をかけておこう。何故か今は魔力を感じないが、回復で使い切ったのかもしれないし急に魔力が戻って他の警備員に見つかるのもまずい」

そう、何故か今の彼からは魔力のひとかけらも感じない。あの異形の姿であったときは魔力を見分けるのが苦手な私でも分かるほど、膨大な魔力だったのに・・・。

おそらく、先生方の受けた傷の治癒に使ったのだと思うが・・・それでも死ぬような傷から回復するとは・・・確かに相当手練のようだ。

私は彼の額に呪符を置くと短く呪を呟く。あまり長くは持たないが寮までくらいなら多分持つだろう。

私たちは彼の両腕を肩に回して立ちあがらせ、寮まで連れて帰った。

人目を避けつつ何とか自分たちの部屋まで辿り着いた私たちは、とりあえず彼をソファーに寝かせた。裸のままにさせておくわけにもいかないのです、とりあえず龍宮のジャージを着せた。私ではサイズが小さすぎたので無理だったし・・・龍宮は何故か動揺してあたふたしていたが落ち着くと素直にジャージを差し出した。

・・・私に着せろという事か？

しょうがないのですばやく彼にジャージを着せていく。下を履かせているとどうしても彼の大事な部分が見えてしまいが気にしない事にする。

「・・・顔が赤いぞ？ 刹那」

「うっ、うるさい！」

まったく余計な事を・・・。

よしジャージは着せだし毛布も掛けた。後は目覚めるのを待つだけなんだが・・・。

「多分だが・・・彼はしばらく目覚めないと思う・・・」

「・・・そうだな。高畑先生に頭を潰されて、本来死んでいるはずなのにこうして生きている。どうやったらそんな事が出来るのか・・・」

確かにいくら高位の治癒術師とは言え、頭を潰された者を治すなんて芸当はできないだろう。頭を潰した時点で死んでいるのだから、それを治すという事は治癒ではなく蘇生となってしまう。そして、この世では蘇生術は存在しないのだから・・・。

「それと、彼が目覚めたとしてそれからどうするんだ？」

「・・・」

そう、それも問題なのだ。彼はいわば部外者で侵入者だ。その彼をこうして匿っているという事は私は学園の反逆者という訳だ。

しかし、彼を見捨てるという選択は私の中には無かった。一度彼を見捨てておいて今更とも思うが、二度も見捨てることはできない。だから私は彼を助ける、もうこれは私の中ではなぜか『任務』くらいに大事な事となっていた。

「とりあえずは、彼が目覚めてから話を聞いてみようと思う。彼は誰なのか、何故あんな所に居たのか。そして多分学園の外の人物だ

ろつから学園の外までの手引を・・・とりあえず今考えているのはこんな所だ」

「うんまあそんな所だろうな。・・・それと私はこのままだと非常にまずいと思うのだが・・・」

「・・・？」

まずい？ 彼はきちんと仰向けで寝かせているし呼吸も乱れていない。体温だって正常な人間のそれだ。まずいことなどないと思うのだが・・・

「いや彼の状態ではなくて、この状況の事だよ」

「あつ・・・」

そう、私たちが居るのは真帆良学園女子中等部の学生寮・・・つまり女子寮だ。当然、男子禁制の乙女の園である。そんな所に男を連れ込んだ何て知れたら・・・

「学園生活は終わりだな。卒業までずっと、入学一週間で男を連れ込んだ淫乱女子中学生というレッテルを貼られるね」

「いつ、淫乱なんてそんなことは・・・」

「だが、言い訳できる状況じゃないぞ？」

「うう・・・」

それは嫌だ・・・もしお嬢様に知れたらなんて思われるか・・・しかも私たちのクラス、1-Aにはいわゆる問題児が非常に多いクラス構成となっている。お嬢様と同じクラスになれたのは嬉しいが、もう色々なタイプの生徒が居て毎日カオスな教室となっている。この間もいきなり寮の自室に「親睦会だイエーイー！」などと突撃してきてそのまま遊びまわってしまった。

あのノリで急に部屋に來られたら、入口のドアから丸見えであるソ

ファーが一目で目に入ってしまう。当然その上に寝ている彼の事も・・・。  
頭を抱えている私を見てため息をつく龍宮は私に向かって

「はぁ・・・まあのれについては私に考えがあるから大丈夫だよ」  
とフォローしてくれた。

「まあのれは明日にして今日はもう寝ないか？ さすがに疲れた・・・」

そう言うとそそくさと寝間着に着替え始めた。

確かに、警備自体は二時間ほどしかたっていないが色んな事があった。眠気も酷くなってきたりして明日に備えてもう寝るべきだろう。私は制服を脱ごうとして無意識にチラと彼の方を見た。白い長髪は邪魔だったのでひとくくりにしており、静かな寝息を立てていた。そんな私を見て龍宮はからかうように

「まだ目覚めてないから安心して着換えるといい」  
とにやけながら言ってきた。

「うるさいっ！」

そのからかいに怒鳴り返し、私は普段より素早く寝間着に着替えた。いくら寝ているといっても男性の前で着替えるのはいささか緊張する。

着替え終わり歯を磨き、布団に入る。するとさつきよりも強い眠気が私を襲う。

そして、いつもよりずっと早く寝付いてしまった。

こうして、私たちと彼の最初の出会いが終わったのだ。

翌日の放課後、私は一人でこれから必要になるだろう品を買いに來ていた。刹那の奴は、お嬢様こと近衛がルームメイトと遊びに行くとかでその護衛をしている。・・・尾行しながら。

朝目覚めた時は彼は昨日と変わらず眠り続けていた。あの調子だと目が覚めても満足に動けないだろう。となるとやはり着替えなどが必要になる。さすがに彼に私たちの服を着続けてもらうのは可哀そうだし・・・というか・・・その、私が・・・困るし・・・。

とりあえずシャツや下着、ジャージなど一通りの物を量販店で揃える。

大量の男物の服をレジに持っていくとレジの女性は何か微笑ましいものを見るような目で私を見て來た。

・・・大方、彼氏の服を買っていく彼女さんなどと思っているのだろう。

私は気恥ずかしい思いでさっさと会計を終え、続いて布団を買いに行った。

さすがにソファアの上に寝かせ続けるのは怪我人にはよろしくないだろうし、もしクラスの誰かが突撃してきたときに真っ先にはばれてしまう。その為、彼にはロフトの上で寝てもらおう事にした。女子寮には各部屋にロフトが付いていて、スペースも結構広い。あそこなら誰かが急に部屋に入ってきててもばれないし、私より背の高い彼が横になれる広さもある。入口にカーテンでも取り付ければそうそうばれないだろう。

布団はセットになっている物を買った。さすがに持って帰れないので店に郵送してもらおう事にした。驚いた事に今日中に運んでくれるらしい。今は4月の初めで新入生も多く、同じような生徒が沢山いるため配達員を増員しているそうだ。

とりあえずはこんな所か・・・結構大きい出費だったが学園長からもらった契約料がある為、財布的にはあまり痛くない金額となった。寮に帰り、男物の服を隠すようにして部屋まで戻り、彼がまだ寝ているのを確認する。今の内に着替えさせてしまおうと袋から買ってきた服を取り出す。そして服に付いているタグを取り外しながらふと気付く。

「・・・・・・・・私が着替えさせなければいけないのか？」

それはそうだろう。刹那はまだ戻ってきていないし他の人に頼むわけにもいかない。

私はたったいまタグを取り外したばかりの男物の下着を手にしたまま、茫然と立ちつくしていた。

お嬢様が無事に自分の部屋に入っていくのを見届けた後、私は自分の部屋に戻ってきた。龍宮には一人で彼の日用品を買いに行ってもらった。本当は私も行くべきなのだろうが、お嬢様が外出するらしく、龍宮一人に行ってもらった。今度何か奢るべきか。

部屋の前に着きドアを開ける。すると龍宮が何故か自分のジャージに顔をうずめている場面に遭遇した。

「……………龍宮、何をしているんだ？」「パンー！！」  
「うわっ！？」

声をかけた瞬間、龍宮はがばつと振り返り、すぐさま懐に隠してあるエアガンを撃ってきた。

私はそれを何とか回避する。BB弾はドアにぶち当たり、コロコロと床を転がった。

「……………私の後ろに立つな」

「どこのゴルゴだお前は！？」

まったく……私だったから良かったものの他の生徒だったらどうするつもりなんだったんだ？

そしてその時になってようやく、私はソファーに彼の姿が無い事に気付く。すると龍宮が私の視線に気づいたのかロフトの方に指を指す。

見てみればロフトに居る彼の白い髪が目に入った。

私はホッと胸をなでおろす。もしかしたら私が居ない間にどこかに行ってしまったのではと思ったのだ。そして彼が着ているのが男物のジャージであり、ロフトに敷いてある布団も新しい物だということが分かった。

「すまない龍宮……色々用意してもらって……」

「構わないよ 私がやりたいからやったまでだしね。」

そう言うと龍宮は持っていた自分のジャージを乱暴に洗濯機に突っ込んだ。

もう一度ロフトの方を見てみるとまだ彼は眠っているようだ。

……………何か違和感が……

そして気付く。ロフトの上部にはいつの間にかカーテンのレールが

付けられており、その端にはカーテンも吊るされていた。  
・・・当然どちらも寮の備品には含まれない。

「いいのか？ 勝手に部屋を改造したりして・・・」

「構わないさ いいんちよだつて部屋を改造してるじゃないか。  
私たちがやってはいけないなんて事はないよ」

「まあそうなんだが・・・」

確かに私たちのクラスの委員長・・・雪広あやかは自分の部屋を自分のお金で増築・改造して無理やり3人部屋にしてしまった。正直、あの行動力は素直に感心する。

「それでどうする？ 今日警備だが・・・」

「あつ・・・そういえば・・・」

そう、私たち新米は早く警備に慣れる為に続けて一週間、警備の仕事を教えてもらう事になっている。昨日が初日で今日が二日目、さすがにサボるわけにはいかない。

「まあ私たちが学校に行っている間も目を覚まさなかったみたいだし、大丈夫だとは思うけどね・・・」

そう言つて龍宮は冷蔵庫を開ける。そう言えば今日は龍宮が料理を作る番だったな。

「・・・じゃあなるべく早く警備を終わらせて帰ろう。さすがに連続して侵入者は出ないだろうし・・・」

そう言つて私も何か料理を手伝うべくエプロンを付ける。

食事を取り、風呂に入り、武器の確認を済ませる。そして警備の仕

事へ向かう。

部屋を出る際に彼の事を見てみたがやはり起きる様子はない。まだ待つ必要があるそうだ。でも私は待ち続ける。もう見捨てない。あの時の救いを求める声を私は忘れない。そう心に近い警備の仕事に向かった。

だんだんと意識が戻ってくる・・・そして体も僅かに動く。目を開けて最初に入ってきた光景はどこかの天井だった。やけに天井が近いな・・・。  
痛む体に鞭を打ちながら何とか起き上がるとそこはロフトの上だった。

俺は真新しいジヤージを着ており、これまた真新しい布団に寝かされていた。外はもう日が落ちて暗かった。すぐそばにあった時計をしてみると0時過ぎ・・・もう深夜か・・・。  
だんだんと覚醒してきて、頭の中にある声が蘇る・・・  
二人の少女の声・・・俺はその子達に助けられたのだろうか・・・  
?しかし何で俺を・・・  
とりあえずロフトから降りることにした。しかし体が動くようになってからはいつても、まだ体中には酷い筋肉痛のような痛みを感じる。歯を食いしばり、何とかロフトの階段を降り切る。・・・  
降りる?

俺・・・どうやって降りた・・・?俺の脚はもう無いはず・・・  
自分の体を見てみるとそこにはちゃんとした『ニンゲン』の体があった。手も、足もきちんとして肌があり指があり関節がある。そう、お

れは『ヒト』だった。

「あ……あああ……」

思わず涙が出る。俺はバケモノじゃない、『ヒト』だ……

しかしあの肉塊になっていたのも事実だろう……俺の頭の中には肉塊になって呻く自分の記憶があるのだから……

だとすれば、どうして俺はこの姿に？ あの肉塊の姿は？

……何も分からなかった。自分が誰なのかさえも

俺は周りを見渡す。殺風景な部屋だが小物類からおそらく女の子の部屋だろう。やはり俺はあの声の少女達に助けられたのだ。

俺は洗面所らしきところを見つけ、俺はその鏡で自分の姿を見る。白い長髪、背が高い。少なくとも顔も『ヒト』のようで安心した。

そして俺はこれからの事について考える。

「どうするか……」

今は何故か居ないが、ここで待っていればあの少女達が戻ってくるだろう。それでどうする？ 何故その少女達が俺を助けたのか分からないが、俺は彼女たちに何も言う事がない。何も分からないのだから。何故あそこの森の中に居たのか、何故生きてるのか、俺は誰なのか、あの姿は……『バケモノ』は何なのか……。何も答えられない……。

ふと、急に俺の背筋が寒くなった。今俺は『ヒト』だ。それは間違いない。でももし……もしも何かの拍子にあの『バケモノ』になっってしまったら？

体中を焼かれるような痛み……指も手も皮膚も無い腕……あれをまた味会わなければいけないのか……？

「嫌だ!!」

思わず声に出してしまう・・・でも耐えられなかった・・・もうあの姿は嫌だ・・・  
そしてまた気付いてしまう。もし俺がまたあの姿になったら・・・俺を助けてくれた顔も分からない少女達はどうなる？ あの姿の体温はとてつもなく高かった・・・自分で自分が熱くて悲鳴を上げるほどに・・・もしその少女達の前であの姿になったら？ もし触れてしまったら？

「あ・・・ああ・・・」

気付いてしまった・・・気付きたくなかった。

俺はここに居てはいけない。居ればその少女達を害してしまう・・・

行くしかない。

ここがどこかも分からないが、ここには居てはいけない。

俺を助けてくれた少女達に一言お礼を言いたかったが、そうもいかないだろう。彼女たちが帰ってくる前に行かなければ・・・恩人を傷付けるなどあってはいけない。

姿が『バケモノ』となっても、心まで『バケモノ』になってはいけない。

行かなければ・・・どこかに・・・

外はひんやりとしていた。気温的に夏でも冬でもなさそうだ・・・  
木々の緑からすると春か？

自分の事が分からなくても、こういった常識は分かるのか・・・

あのあと俺は窓から外に出た。あの建物がどんな物かは分からないが、部屋からして恐らく集合住宅の一種だと思われる。という事はドアの外にもあのような部屋が沢山あり、そこに住んでいる物も大勢いるだろう。今の俺の状況だと人目に付く事は避けなければ・・・  
そう思い、俺は部屋の窓から外に出た。幸い部屋は一階だったので楽に出れた。

そして俺はたった今出てきた建物から離れながら、夜の道を歩いて  
いた。

「これからどうするか・・・」

俺はこれからどうしようかと考えた・・・しかしやはりどうしようもないというのが現状だ・・・なんせ記憶がないのだから頼る人が居るのかも分からない。

警察は・・・駄目だな。警察で記憶喪失ですなんて言えるわけがない・・・。

「はぁ・・・本当にどうするか・・・」

「君。ちよつといいかな？」

とその時、後ろから声をかけられた。その男は

「こんな時間に外で何をしてるんだい？ もう夜も遅いんだから早く家に帰りなさい」

その男は無精髭を生やしている30代くらいの男で

「お〜い？ 聞こえているかい？」

オレヲコロシタオトコダッタ

### 3話

熱い……！ 右手が……熱い……！！

「おいどうした君！？ おいつ！」

ヤメロ……来るな……来ないでくれ……もう殺さないでくれ……

ああこの感じ……駄目だ、また『アレ』になっちゃった……また『バケモノ』に……  
いや……だ いやだいやだいやだいやだいやだ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ！！！！

「おい！聞こえないのか！？ おい！！ くっ！学園長！聞こえますか？至急こちらに治療術師を……！」

！？ 仲間を呼んでいるのか！？ やっぱり俺を殺すつもりなのか！？

ああ……また死ぬのか……

俺は不意に空を見上げる。視界に入るのはあの時と同じ星空……俺はまた同じ星空の下で、同じ相手に同じように殺されるのか……ああ……こんな事ならあの少女達にお礼を言っておくんだ……結局顔も分からなかったな。

無精髭の男が俺に近づいてくる。俺を殺すつもりなんだろう……

……嫌だ

ふと俺の中にそんな考えが浮かぶ。あの時と同じ、この男は殺す側で俺は殺される側。同じように死ぬだけだ……。

・・・嫌だ

もうあの少女達に助けてはもらえない。そんな幸運は二度も続かないものだ。

・・・嫌だ

俺はこの男に殺される運命なんだ。諦める・・・俺・・・

・・・嫌だ

あの少女達にお礼も言えないまま、俺はここで死ぬんだよ！！受け入れるよ俺！！

「嫌だつつつてんだろぅがぁ！！！」

「!?!」

・・・そうかい、俺がこんなに馬鹿だとは思わなかったよ。もう勝手にしな。

そんじゃ最後に餞別として教えてやるよ。殺されそうになっている奴が生き残る方法をな

例えば逃げたりだとか命乞いして見逃してもらうとかだな。だけど一番確実な方法はこんな方法じゃない。殺されそうになっている奴が生き残る確実な方法とは

「コロシテヤル」

That's right! その通りだ。じゃあせいぜい頑張れ

よ？ 俺・・・生き残ってあの少女達にお礼を言わなきゃだしな・・・

そして、俺は再び『バケモノ』となる・・・

「高畑先生より緊急連絡です！ 中等部女子寮付近にて敵勢力を確認。数は一。現在交戦中とのことですよ」

私たちにそんな連絡が来たのは見回りも終わり、もう解散という時だった。

私と龍宮は今日は二人のみで市街地の警備だった。市街地なら結界から離れている為、新米二人でも大丈夫だと判断されたのだろう。

実際、市街地では異常はなかった。

警備を終えた後、刀子先生にその旨を報告しようとした所、先ほどのような通信が入ってきた。

「どうやら私たちが一番近いようですね・・・私たちも増援に向かいます！ 行きますよ！」

と刀子先生に言われ、私たちは連絡のあった女子寮に向かっていった。正直、高畑先生なら大半の敵なら退けられると思うのだが・・・そんな事を言う訳にもいかず、私と龍宮は大人しく目標地点に駆けつけた。

嫌な予感がする・・・

私は前を走る刀子先生と刹那の後を追いながら、自分の中でどんどん大きくなっていく嫌な予感に苛立ちを感じていた。

そしてこの魔力・・・報告のあった場所に近づいていくと魔力がどんどん大きくなっていくのが分かる。前を走る魔法先生・・・刀子先生は刹那と同じタイプらしく、それに気付いた様子はない。

そしてこの状況・・・まるで昨日の事件のようだ・・・侵入者、膨大な魔力。本来ならこれだけの判断材料で昨日と同じと判断するのは気が早い・・・報告のあった場所・・・女子寮付近。

「もうすぐで女子寮です。二人とも、気を引き締めなさい」

やはり感じる魔力は近づくごとに大きくなっていく。

愛用のスナイパーライフルを強く握りしめる。そして、私の中にあの記憶が蘇る。そう、あの時のような

ガキーン！！ ドゴォー！

そして不意にこちらに聞こえてきた異音・・・剣劇の音に何か重たい物を叩きつけるような音・・・恐らく高畑先生で間違いないだろう。

あの曲がり角を曲がれば連絡のあった場所だ。私たちは警戒を厳にしなから彼らの前に躍り出る。

そして、私はついさっき自分の部屋で見た白い長髪を目にするのだ  
った・・・。。。。。

彼はいったい何者だ？

僕は、学園長に戦闘に突入した旨を伝え、そのまま彼と戦っている。最初は唯の不真面目な学生だと思った。白い長髪に僕くらいの高身長、確かに変わった出で立ちだがここ真帆良ではそれも普通といえるだろう。

だが僕が話しかけた途端、彼は僕を見てかなり驚いたようだ。確かに僕は広域指導員という名の暴徒鎮圧も行っているから、そこそこ顔が知れてはいるが・・・彼の驚きようはそういった類のものではなかった。そう、まるでこの世の終わりだともいうような・・・顔を真っ青にした彼は、急に苦しみだした。腕を抑え、息も荒くなっている。明らかに正常ではない。話しかけてもこちらの声が聞こえないようだ。

これはまずい状況だと判断して学園長に治療師を派遣するよう要請する・・・その途端、彼の表情が変わった。・・・いや、変わったのではなく無くなったと言った方が正しいだろう。さっきまで真っ青な顔色で苦悶の表情をしていた彼は、今は無表情。と思えば急に口を開け

「嫌だっつってんだろっがあ!!!」

と大きく咆哮する。その言葉に周りの空気が震える。僕は無意識に後ずさっていた。

しかし彼は止まらない。下を向いていた視線を僕に向けると

「コロシテヤル」

と静かに呟いた。その瞬間！彼から強烈な殺気が溢れ出す。僕は本能的に両手をポケットに入れようとす

その時、すでに僕の目の前には大きな黒い刃が迫っていた。

「くっ!？」

反射的に体を捻って刃を避ける。しかし避けきれずに頬を浅く切り裂かれた。そしてすぐさま目の前の青年から距離を取る。

・・・そこに居たのは、右腕が黒く大きな刀になっている先ほどの青年だった。

青年の右腕はひじの部分からジャージが破れており、そこから刃渡り2mくらいの刃となっていた。形状は片刃で幅は10?ほど、全体が黒くそれは闇夜で鈍く光っているように感じた・・・大きさはともかく、形だけを見ればでかい刀だろう。

頬から垂れる血を拭いながらもう一度青年を観察する。

青年は長い右腕を地面につけ、こちらを見ていた。その目は鋭く、こちらを睨んでいた。

彼は・・・なんだ・・・?

侵入者・・・?今の所それしか思いつかない。真帆良内の魔法関係者で、彼のような人物は聞いたことも無い。

僕は静かに両手をポケットに入れる。あの右腕・・・見た目通りの刀だとしたら、その重さは相当なはず・・・それを僕も気付かないほど速く振ってくるとは・・・。最初は肉体を魔力が気で強化しているのかと思っただが、彼の肉体にはなにも纏ってはいない・・・。となるとやはり腕力だけであの右腕を振ってきたという事か・・・。これは本気で行かないとこっちがやられてしまうだろう。なんとか隙を作って咸卦法をしなければ。

僕はポケットに入れた拳を握りしめる。彼はまだ動いていない。

彼の呼吸を計る・・・吸う・・・吐く・・・吸う・・・吐く!!!

間髪いれずに右手で居合い拳を放つ！しかし呼吸の切れ間を狙った攻撃は彼に当たる事はなかった。

当たると思われた瞬間、彼の姿がブレて、狙いが外れた。そして、気付いた時には右下から重圧が

「うおっ!？」

咄嗟に左の拳を放つ。居合い拳でもないただのパンチだ。そして彼の右腕の刀に、僕の拳は防がれた。

拳が当たると、辺りに金属を打つような音が響く。

瞬動でもないのにこのスピードとは・・・

僕の目の前には、さっきまで10mほど離れていたはずの彼の姿があった。彼は僕の居合い拳をしゃがんでかわすと、そのまま体勢を低くしたまま、地を駆けるように僕の所まで迫ってきたのだ。

僕はその姿を何とか目で追えた為、彼を止める事が出来たが・・・もし彼が瞬動を使いこなしていたらどうなっていた事が・・・

僕は額から汗が垂れるのも気にせず、再び両手で居合い拳を放ちながら後退し距離を取る。さすがに両手の攻撃は全て避けられないように、時たま右手の刀で居合い拳を防いでいた。

徐々に距離を離していき、十分に間合いが取れた所で左手に「魔力」、右手に「気」を溜める。すると、彼がこちらの意図に気付いたのか一気に距離を縮めてくる。

しかし、咸卦法は魔力と気を溜めてしまえば後は融合するだけ、この距離なら問題ない。

僕は両手を合わせ、魔力と気を融合する。途端、僕の体から力が溢れ出る。

そして僕に向かって一直線に駆けていた彼が急停止する。咸卦法の力を感じ取ったか・・・。

しかし彼は一体・・・  
刃渡り2mを超す大刀を生身で振り回す体、僕の居合い拳を見切る目、瞬動並みのスピード・・・しかも彼からは魔力は感じるもの、それを使っている様子はない。

・・・いや、今は考えている場合じゃない。彼をどうにかしなければ・・・

彼はこちらを窺ったまま動かない。かなり警戒しているらしい。お互い動かずに様子を窺う。僕は両手に力を込め、いつでも攻撃できるようにする。彼も長い右腕をこちらに向けたまま微動だにしない。根競べってわけか・・・。

「雷鳴剣!！」

いきなり、彼の後方より稲光と衝撃が襲う。これは神鳴流剣術・・・増援か

直撃地点より煙が舞う。それを飛び越えて一人の女性が僕のそばまで来る。それは抜き身の刀を構えた葛葉先生だった。さっきの攻撃は彼女だったらしい。

「高畑先生!大丈夫ですか!？」

と彼女が問いかけてくる。未だに荒い息をしている事から、どうやら相当急いでくれたらしい。

「ええ、大丈夫です。増援感謝します」

「お気になさらず。・・・それで、敵は?」

そう、彼女が放った攻撃は確かに彼の元に着弾した・・・が。僕には確信があった。恐らく、当たっていないと

「！！ 上です」

「!?!」

彼は上空に居た。月を背にしていた為気付くのが遅れた。しかしこんなにも長い間滞空しているなんて・・・どれだけ高く飛んだのか・・・  
彼は右手の刀を真下に向けながら高速で突っ込んでくる。狙いは・・・  
・ 僕か!!

僕は前へ転がるように回避する。次の瞬間、僕の居た所に彼の刀が深々と突き刺さった。

彼の刀はそのおよそ8割をコンクリートに埋め込ませてしまう。

今だ！僕は地面に刺さった刀を抜こうとする彼に向かって豪殺・居合い拳を放とうとする。葛葉先生も好機と見たのか獲物を手に彼に攻撃を仕掛ける。  
しかし

パン！ ガキイ！

二つの音が僕らの攻撃を妨害する。

僕は後ろから狙撃を、葛葉先生は斬激が当たる瞬間、自分の刀を別の誰かに防がれていた。

僕は狙撃は避けたがその為、攻撃は中断されてしまった。

その間に、彼はコンクリートを切り裂きながら自分の右手と一体化している刀を地面から抜いてしまった。

後ろから誰かが歩いてくる。それは褐色の肌に長身というあまり中学生には見えない中学生が居た。

彼女には見覚えがある。1週間ほど前に真帆良学園女子中等部に入

学し、僕の担当する1-Aの生徒でもある龍宮真名だ。

そして葛葉先生の攻撃を受け止めたのは、同じく僕の生徒である桜咲刹那が居た。彼女は至近距離で葛葉先生に睨まれており、気まずそうな顔をしている。

僕は龍宮君に聞く。なるべく冷静に

「君は、何をしているんだい？」

すると彼女は、真面目な顔で

「ちょっと事情があつてね」

とだけ言ってきた。

その間、白髪の青年はこちらを見ているだけだ。その目が誰を見ているのかは、分からなかった。

さて、どうするか。

僕は両手に入ったままの力を緩めずに、この問題をどうするか悩み始めた。

## 4話

「・・・どういう事ですか？ 刹那」

やばい・・・すごい怒ってる・・・。

目の前に居る刀子先生は同門　つまり同じ神鳴流剣術の使い手だ。その為、私が真帆良に居る間は彼女と一緒に鍛錬することが多い。そして、彼女の実力は私より上・・・つまり私の師匠のような存在だ。その相手に刃を向けているのだから彼女の相手を射殺すような視線も仕方が無いといえる。

・・・でももう少し柔らかい表情をしないとまた彼氏に逃げられ

ピュン！

「!?!」

不意に剣戟が私を襲う。なんとか避けれたがその攻撃は明らかに首筋を狙っていた・・・！

「ちよ、ちよつと!?! 当たったらどうするんですか!?!」

「失礼なことを考えていたようですからね・・・それに、私の弟子ならこれくらい避けてもらわないと」

・・・また表情に出ていたのだろうか。龍宮にも言われたが私はそんなに顔に出してしまうタイプなのだろうか・・・？

「それで・・・もう一度聞きますよ？ 何のつもりですか？ 刹那・・・なぜ侵入者を庇うのですか？」

それは・・・

言葉に詰まる。

ふと後ろを振り返ると、右手を巨大な刀に変えた彼の姿がある。彼は若干俯きその表情は分からないが、その場でじつと立ち尽くしていて動く様子は無い。

目の前の刀子先生に率いられてこの場に來た私と龍宮は、高畑先生の戦っている相手が分かると思えばし呆然としていた。

彼は私達の部屋で寝ていたはず・・・？ 私達が警備に出かけた後に気が付いたのだろうか・・・？

もう動いても大丈夫なのか？何で高畑先生と・・・それにあの右手は・・・？

「私は先に高畑先生の援護に向かいます！ あなた達はここに居なさい」

刀子先生は私達にそう言い残すと、素早く高畑先生と彼の元へ駆けていった。

どうする・・・？ どうしてこうなっているのか分からないが、このままにしておくわけにもいかない・・・。でもどうすれば

「とりあえず止めるぞ」

「えっ？」

そう隣の龍宮に言われて、私は昨日の事を思い出した。

そうだ・・・私は決めたじゃないか・・・彼を助けると。二度も見捨てないと。

どうして彼が高畑先生と戦っているかなんて今はどうでもいい。今

は彼らを止めないと！

「私は高畑先生をけん制する。刹那は葛葉先生を止める」

龍宮はそう言うのと持っているライフルに弾を込める。私も刀袋に包んである刀を取り出す。

「しかしそれだと彼はどうする？ 下手に介入したら私達も彼に敵と認識されるんじゃない・・・」

そう言うて彼を伺う。周りの明かりは街灯のみで薄暗く、彼の表情を伺う事は出来ない。でもあの様子だと混乱しているんじゃないかと思う。

彼の様子はただがむしゃらに攻撃しているように見える。そんな中に飛び込めば私達も敵と思われるかもしれない・・・。しかし龍宮はフツと笑うと

「大丈夫だ。混乱している人を静めるには、こちらが冷静になって話しかければいい。こちらの声が届けば正気に戻るだろう・・・。  
・タブン」

「いま多分って言わなかったか？」

「気のせいだ。じゃあ行くぞ、彼がピンチだ」

そう言われて彼らを見てみれば、丁度刀子先生が雷鳴剣を放ったところだった。

稲光と雷音が響く。

私はそれを見て駆け出す。とにかく彼らを止めないと・・・！  
そして、私は地面に刀を埋め込ませて動けなくなった彼を庇うように、刀子先生の前に躍り出たのであった。

「刀子先生・・・彼は敵ではありません」

私はいまだにこちらを睨み付けている刀子先生に言う。私の実力で彼女には適わない。ならば話し合いで解決しなければ・・・しかし刀子先生はいまだにこちらに刀を向けながら少しずつ間合いを狭めてくる。

「敵じゃない？ 何を言っているのですか。 彼は高畑先生に攻撃してきたのですよ？」

刀子先生はそう言いさらに間合いを縮めてくる。

やっぱり通じないか・・・。彼がどのような経緯で女子寮を抜け出し、高畑先生に攻撃したのかは分からないが大体の予測はつく。

恐らく、彼は自分を殺そうとした高畑先生を見て錯乱しているのだ。それはそうだろう、誰でも自分を殺そうとした相手とバッタリ会えば誰でも錯乱する。

でもこの事を言うわけにはいかない・・・。その事を言ってしまうと昨日、真帆良に進入し高畑先生に倒された事も言わなくてはならないだろう。

そしたら、この場は切り抜けられても今後彼がどうなるかは分からない。

・・・だとすれば残った方法は一つ。彼を落ち着かせて口裏を合わせるしかない。

彼は私の従兄弟だとも言って、私に会いに真帆良に来ていると・・・なんで高畑先生に攻撃したかは・・・。龍宮に考えてもらう。

とにかく彼を正気に戻さなければ。

私は彼に話しかけようと後ろを向く。彼はさっきと同じく右手と一体になった刀を地面に付け、立ち尽くしていた。

しかし一つだけさつきとは違ふところがあつた。彼はもう俯いては居なかつた。顔を上げ、こちらを真つ直ぐと見ていたのだ。まるで・・・探していた何かを見つけたように・・・そしてゆっくり口を開くと

「その声・・・もしかして君が・・・？」

私に分かる・・・？　もしかして匿っていた間に意識が戻つて・・・！

「私に分かりますか！？　そうです！私は敵では　　」魔法の射  
手・戒めの風矢マキカ！！アエール・カフトウーラエ」

彼が私の事が分かれば大丈夫だろう！そう思つて私が彼に敵意が無い事を言おうとした瞬間、黒い戒めの魔法が彼に絡みついた。その数およそ数十本、大量の捕縛魔法が絡みついた所為で彼の姿は一瞬で見えなくなつてしまつた。

私はあまりに急なことで動けなかつた。が、目の前で起こつたことを理解した。刀子先生は魔法は使わない・・・高畑先生も同じだ。つまりこの捕縛魔法は他の人の

ここまで考えた所で私の後ろに誰かが居る気配を感じる。途端、私は首に衝撃を受けて目の前が暗くなつた。

「・・・あなたは少し寝ていなさい。後の事は私達がやります」

刀子先生の声だ。ああ、ミスつた・・・。気を抜いて後ろからやられたんだ・・・。

そう思つて私は地面に倒れた。そして、倒れた視線の先には影のような使い魔に押さえつけられている龍宮の姿が目に入る。

・・・龍宮もやられたか。私は唇をかみ締める。  
また・・・助けられなかった・・・！ 私は・・・私は！！！！  
なんとか立ち上がるうと四肢に力を入れようとすが目の前は暗く  
なるばかり、私の周りには多くの人が居る気配がする。  
あ・・・ああ・・・だめだ・・・気を失っちゃ・・・助けなきゃ・・・  
・助け

「刀子先生・・・彼は敵ではありません」

ふと、意識が戻る。誰かの声が聞こえる・・・どこかで聞いたよ  
うな・・・誰だ？

周りを見渡す、俺の周りに居るのは四人。まず俺の目の前に髪をサ  
イドで括った少女と、その彼女と対峙している成人女性・・・少し  
離れた所に俺を殺そうとしたあの男と、それと退治している背の高  
い褐色の少女。

この娘達は確か

そう、思い出した。

俺がああ『バケモノ』になっている時、俺を殺そうとしてきた二人  
と一緒に居た娘だ。

あの時、この少女達は遠くで見ているだけだったがなぜここに・・・  
？

「ちょっと事情があつてね」

ちよつと離れた所に居る褐色の少女の声が聞こえる。

この声は……どこかで

『すまない龍宮……色々用意してもらつて……』  
『構わないよ 私がやりたいからやつたまでだしね。』

！！ そつだ、俺が目も開かなくて動けなかつたときに聞  
こえた声！

あの声と同じ声だ……！

……じゃあこの娘達が俺を助けて……？

その時、目の前に居た少女がこちらを振り向いた。その顔はこちら  
を心配しているようで俺を見つめてきた。

やっぱりあの時の少女だ……。

俺は彼女に離しかけようと口を開いて

「その声……もしかして君が……？」

途端、彼女の顔がピアと明るくなる。

「私分かりますか！？  
マギカ アエール・カフトウーラエ  
手・戒めの影！！」

そうですね！私は敵では

『魔法の射サギタ』

彼女は何かを訴えるような事を俺に言おうとした。しかしその瞬間、  
上空から俺に向かって黒い影のような縄が絡み付いてきた。その黒  
い縄は俺の腕や足に絡みつき俺を巻き取っていった。しかもその数

は止まらず次第に俺はたちまち黒い繭のようになってしまった。  
あまりにとつさの事で俺はその場から動けなかった。そして気が付いたときには腕も足も動けなくなってしまっていた。

ドサッ

そして『外』から聞こえる何かが倒れるような音。そう、重さからして人くらいの

「・・・あなたは少し寝ていなさい。後の事は私達がやります」

そして聞こえる女性の声・・・俺を助けてくれた少女達とは別の声だ・・・。

！！ まさか彼女が！？

俺は黒い縄を振り払おうとするが、縄はがっしりと俺の体中に巻きついていて離れない

俺は外に居る人物に怒鳴る！

「おいっ！ その娘に何をした！？ これをほどけ！」

「お黙りなさい！ そう言っただけで私達を混乱させるおつもりなんですよ。それがその行きませんわよ！」

聞こえてきたのはまた別の声・・・そして気づく。俺の周りにはさつきよりも大勢の人が居る気配がする事を・・・

「大気よ 水よ（アーエール・エト・アクア） 白霧となれ（ファクティ・ネブラ） この者に（イリース・ソヌム） 一時の安息を（ブレウエム） 眠りの霧」  
ネブラ・ヒュプノーティエイカ

そしてまた別の声で呪文のようなものが聞こえてくる。

途端、急に強烈な眠気が俺を襲う。　なんだ！？　こんな急に眠くなるなんて

・・・！？　まさかこの呪文みたいなのは俺を眠らせる　　く  
そっ！！

俺は咄嗟に唇を噛み切る。唇から血が流れ鋭い痛みが走るが、依然として眠気は取れない。

くそっ！！　外はどうなっている！？　あの娘達は無事なのか！？　俺はがむしゃらに暴れる。しかし俺に絡み付いている黒い縄はよほど強力なのか千切れる様子は無い。

おい・・・ふざけるなよ・・・せつかく命の恩人に会えたつてのに・・・その恩人が目の前で危険な目に遭ってるって言うのに・・・俺は何も出来ないのかよ・・・

俺が・・・『バケモノ』だから・・・彼女達を危険な目に遭わせたのか？

ちくしょう・・・彼女達に危険な目に遭って欲しくないから外に出たのに・・・その所為で彼女達が・・・

ちくしょう・・・ちくしょう・・・ちく

僕は龍宮君の攻撃を躲しながら、彼の様子を伺っていた。そして彼が、龍宮君と桜咲君の声を聞いた途端、僕と戦っていた時のような無表情ではなく何かを見つけたような表情となったのを確認した。彼女達と彼は知り合いなのか・・・？

「龍宮君、一つ聞いてもいいかい？」

「なんだい？ 高畑先生」

会話だけ見れば普通だが、彼女はこの会話中にも構えた拳銃をこちらに向けて攻撃している。彼女は両手にオートマ銃を持っており、それをこちらに撃ってきている。その狙いは正確で僕は時折銃弾を弾きながら彼女に話しかける。

「もしかして、彼は君達の知り合いかい？」

「・・・まあそんなような所だよ」

彼女はどこか歯切れが悪く答えた。

・・・なるほど、確かにやっかいな事情がありそうだ。

ここはまず話し合いを

と僕が彼女に話しかけようとした所、上空から巨大な黒衣仮面の使い魔が龍宮君に飛び掛った。彼女はその存在に気づくと手にした銃をそれに向かつて撃つが、その使い魔は弾が当たろうとお構いなしに彼女の銃をその長い腕で弾き飛ばすと、彼女の腕を捻り地面に押さえつけた。

そして僕らの前に空から高音君が降り立った。上空を見てみれば、筈にまたがった佐倉君の姿があり、高音君はあそこから降り立ったと思われる。

高音・D・グッドマン。非常に優秀な魔法生徒で、今日の警備にも参加していた生徒だ。彼女は影を使用した魔法を得意としている。龍宮君を押さえつけている仮面の使い魔も彼女が使役している。そしてこのとき気づいたが彼の居た所には黒い人ぐらいの大きさの繭が出来上がっていた。それはよく見れば何重にもなっている捕縛用の魔法の矢の多重掛けだった。さすがの彼も力づくで数十本の捕縛魔法を破ることはできないようだ。

「お黙りなさい！ そう言って私達を混乱させるおつもりなんですよ。ところがそうは行きませんわよ！」

繭の中に居る彼が何か言ったらしく、彼女が彼に怒鳴りつけていた。そして彼女が繭に眠りの霧の魔法をかけると、彼は眠ってしまったらしく何も聞こえなくなった。

繭の前には桜咲君が倒れており、その後ろに葛葉先生が立っていたので、恐らく彼女が桜咲君を昏倒させたのだろう。

60

そして、丁度そのとき僕の周りに大勢の魔法関係者が降り立った。ガンドルフイーニ先生などの魔法先生や佐倉君のような魔法生徒・・・その数およそ30人。警備に参加している魔法関係者が全員集まってしまった。

・・・おそらく学園長の連絡を受けて全員集まったのだろう。

ガンドルフイーニ先生が僕に近づいてきて話しかける。

「高畑先生、侵入者は・・・？」

「もう終わりましたよ」

僕は苦笑して高音君の作り出した繭を指差す。それを見て集まった魔法関係者はホッと息をつく。

そして、何人かは倒れている桜咲君と、高音君の使い魔に押さえつけられている龍宮君を見て困惑の表情を浮かべる。それはそうだろう、彼女達はいこの間、全員の前で警備に参加することを挨拶したばかりなのだ。

「あの・・・高畑先生？ 彼女達はとうしたんですの？ なにやら高畑先生に対して攻撃していたので押さえつけましたが・・・どうしてこんなことに？」

いまだに龍宮君を押さえつけるように、自分の使い魔に命令を出している高音君が、困惑した様子で僕に問いかけてくる。  
直接、彼女を抑えている彼女自身が一番困惑しているのだろう。

「どうやら、彼女達は彼と知り合いらしくてね」

僕も彼女からはっきりと聞いたわけではないが恐らくそうなのだろう。

でないと、僕達を妨害してきた理由の説明が付かない。

僕の言葉に周りの魔法関係者がざわつく・・・

「侵入者を手引きしたのか・・・？」 「裏切り者だったのか・・・」

「敵・・・？」

などと物騒な言葉が聞こえてくる。

・・・このままでは変に誤解されたままになってしまう。

僕もこの状況がよく分かっていないため、まだ意識がある龍宮君に説明してもらおうと彼女に話しかける。

「・・・龍宮君、説明してもらえるかな？」

彼女は地面に伏せられながらこちらを見る。・・・だが、その口は開かなかった。

周りから「やつぱり・・・」などと聞こえてくる。僕も自分の生徒を疑いたくはない。きつと何か事情があったのだ。しかしそれを彼女達から直接話してもらわないとこちらとしてもどうしようもない。僕は再度彼女に問いかけようと口を開いた

その時

「やあやあやあ！ 皆さんお集まりのようで！」

上空からそんな声が聞こえてきた。みんなで空を見上げる。そこには和服をまとった男が浮いていた。

・・・誰だアイツは？

この場に居る全員がそう思ったに違いない。なぜなら彼の顔はこの場に居る誰も知らないのだから・・・。つまり、『外』の人間

その事実が分かり、全員が武器を構えその男に向ける。しかしその男は武器を自分に向けられても飄々としていた。

「おおー！ 自分らメツチャ殺気だつとんなあ！ そんなピリピリしたらあかんでえ？」

と軽口をたたいてけらけらと笑う。

・・・関西弁？

！！

「関西呪術協会か！？」

僕の言葉にこの場に居る全員が息を呑む。それを見ていた男はまたけらけらと笑い両手を叩く。

「かつかつか！ 残念！ ハズレや」

その男は持っていた扇子を開くと自分をパタパタと扇ぎながら言う。

「まあ似たようなモンなんやけどな　そんなじゃ自己紹介といきますか！　ワイの名前は禅<sup>ゼン</sup>！　座禅の禅やね！　日本陰陽連合に所属したる陰陽師や！　よろしゅー頼むわ！」

「……日本陰陽連合？　聞いたことが無い……  
周りの魔法関係者も聴き覚えが無いのか首を捻る。それを見てあの男……禅は落胆したように言った。

「あちゃー　やっぱ誰も知らんかあ……　まあ出来たの最近やし、しゃーないかあ……」

「……よく分からないがあこの男は学園の外の人物……つまり敵と  
いうことだろう。」

僕はポケットに両手を入れ、上空の男に問いかける。

「それで？　その日本陰陽連合とやらが、ここ真帆良に何の用だい？」

すると禅はうれしそうに両手を叩くと袖に扇子をしまいつつ答えた。

「おっ！　よう聞いてくれましたりました！　いやー実はな、ワイも今日は偵察だけだったんよ？　あの天下の真帆良にはどんなやつがお  
るのか？　どの程度の戦力か？　それを調べたらさっさと帰るつもりだったんやけど……なんか自分ら皆一箇所に集まってるやんけ  
？　どうしたんやるなあって思っ  
て来てみれば何と8時でもないのに全員集合！ときた！！　まあそつちの問題は片付いた見たいやけど……」

そう言っ  
て禅は黒い繭を指差す。

偵察・・・やはり敵か。僕と同じように周りの魔法関係者が戦闘体制に入る。

そして禅は扇子をしまった袖口をあさりながら、こちらを嬉しそうに伺う。そして

「どうせみんなそろってるんやから、何人が殺つところと思てな」

僕らはその言葉を聞いた瞬間、全員が動く。

ある者は魔法の詠唱に、ある者は獲物を手に取り

「まあそう言う事やから、そろそろやりまひよか？」

そして、禅は手を突っ込んでいた袖から、2枚の札を取り出すと、さっきまでの笑みとは比べ物にならないほどの邪悪な笑みを浮かべると

「レッツ・パーティー！　なんてな？」

その札をこちらに投げつけてきた

。

## 5話

闇に落ちていた私の意識は、誰かが私の肩を揺さぶり、深淵より少しずつ浮かんでいった。

「・・・おい!・・・。ん那! 起きろ刹那!」  
「パン!」

そして私は、頬に感じた鋭い痛みによって、一気に現実に戻された。・・・痛い  
目を開けると私を覗き込んでいる龍宮の姿が見えた。視界はまだぼやけているが彼女の切羽詰まった表情ははっきりと読み取れた。

「やっと起きたか・・・意識はしっかりしているか?」

確か彼を助けようと刀子先生の前に立ちはだかっただいいけども、逆に彼女に気絶させられて・・・!?

「龍宮! 彼はどうした!」

そう、気絶してからどれくらいの時間が立っているのかわからないが、下手をすれば彼はもう捕まっているかもしれない・・・。  
私の質問に龍宮は困惑した表情で周りを見渡す。

それにつられて私も周りを見渡してみる。そこは私たちが居た、女子寮から少し離れた道路ではなく、何故か女子寮の目の前、それも門の内側に居た。

「!?! 龍宮!! 何故こんな所に居る!? ここに居たら一般人に魔法がばれて うむっ!?!」

何故女子寮の前に居るのかを龍宮に聞いた。ただそうとした瞬間、龍宮はすばやく私の口を抑え、もう片方の手で自分の口の前に人差し指を立て、『静かに』のポーズをした。

しかしこちらとしては静かにしている場合ではない。よりもよって女子寮の前なんて・・・お嬢様が居るのに！

口を抑えられているので目だけで龍宮に抗議する。すると龍宮はハア・・・とため息をつき「静かにしてくれよ・・・？」というと抑えていた手を放してくれた。

「・・・龍宮、説明してくれ。私が気絶している間の事を」

「・・・正直、私も何があったのかうまく説明できる自信はないんだが・・・ありのままを話してみるよ」

そして龍宮は声を潜めて私が気絶してからの事を話してくれた。

彼は何重もの捕縛魔法で捕まってしまった事、龍宮自身も増援で駆けつけた魔法生徒に拘束された事、その時に上空に関西弁の男が現れた事、その者は日本陰陽連合なる組織の者だと名乗った事、そして、その者が攻撃を仕掛けてきた事。

「日本陰陽連合・・・？ 聞いた事が無いな・・・」

「関西出身のお前でも知らないか・・・相当に新しい組織なんだろうな・・・」

そう、私は本来西の人間なのだが、わけあって今はここ 関東魔術協会に籍を置いている。

なので少しは西の事情にも詳しいのだが、それでも日本陰陽連合など聞いたことも無い。

「それで？ それからどうしたんだ？ みんなは？」

「・・・その男は2枚の呪符を投げて来た。おそらく式神の類だろうが・・・2体の・・・その・・・何て言うか・・・」

・・・？

龍宮は急に口ごもった口調になり、思案している風な表情になる。それは言いにくいのではなく、どう言っているのか分からないといった感じだ。

「・・・2体の・・・何だ・・・？」

私は恐る恐る聞いてみる。すると龍宮は意を決したように言った。

「あれは、まるで

『神さんみたいやった・・・かいな？』

龍宮の声を遮るように誰かの声が割って入ってきた。その声は私たちの上から聞こえてきて、ふとそちらを見てみれば和服の男が立っていた。

一見すればどこにでもいそうな風貌の男だが・・・その眼光は極めて鋭く、裏の人間であることを再認識させた。

龍宮は銃を、私は刀をその男に向けて構える。

「・・・ん？ あんさんら・・・よく見たら・・・」

ふと、男は私たちをじろじろと見て、頭を捻るようなしぐさをする。私と龍宮はそれぞれ獲物を相手に向けながら、じりじりと後ずさる。

いつ接近してきたのが全く分からなかった・・・。私もそうだが、人一倍感覚が鋭敏な龍宮が気付かないとは・・・確かに相当の手練れらしい。

男は少し唸っていたが急にポンツと手を叩くと嬉しそうに叫んだ・

・私にとっては何よりも隠していたい傷跡を……。

「おお！！ よお見たらあんさんら！ 半妖と半魔かいな！！ しかも白鳥の半妖とは！ いや〜これはあいつらにいい土産が出来たわ！」

『半妖』 『白鳥』 ……その言葉を聞いた途端、私はびくりと痙攣したように動きが止まった。 ……その言葉は私に重しのように押しかかる。 一生背負わなければならぬ重しを……。 だからなのだろう。 後ろに居た巨大な重圧に気付けなかったのは……。

「ほんなら雷坊？ その娘らは傷つけんといてなー」

そして……私たちは ……。

僕はもう何度目かも分からない豪殺・居合い拳を『敵』に叩きこむ。 攻撃は確かに当たったはず、これまでもほとんどを急所に当てた。

だが、そいつは豪殺・居合い拳を受けても何事も無かったかのよう  
に僕に向かつて突っ込んでくる。

僕はそいつの突進を極めて大げさに避ける。敵から10mは距離を  
取って避ける。これまでもこうしてきたが、それでも僕の体にはこ  
れまた何度目かも分からない衝撃が襲う。

それは風だった。いや・・・風なんて優しい物じゃない。突風・・・  
いやそれ以上かもしれない。その風は敵の周りに吹き荒れており、  
周囲を限定的な暴風域に変えている。

風はまるで見えない壁のように僕を襲い、体を木の葉のように吹き  
飛ばす。

僕は吹き飛ばされた先にあった民家の塀にぶち当たった。

塀にひびが入るほど強く飛ばされた僕は、苦痛を押し殺しながら目  
の前に居る敵を睨みつける。

そこに居たのは身長10mはあるうかと思われる大男だった。体つ  
きも筋骨隆々としており、上半身は裸で下半身に装飾のついた腰巻  
を付けている。その手には麻袋のような若干細長い袋を持っており、  
その袋の口から風が出ている。おそらくこいつの風はあの袋が発生  
させているようだ。

その顔は鬼神のごとき形相で憤怒に染まっている。しかし、最初に  
見た時からずつと表情が変わらない事から、あれが本来の表情なの  
かもしれない。

そう、目の前に居るのはまさしく風の神・・・風神だった。

あの男が僕らに向かつて投げつけて来た呪符・・・僕たちはそれを  
ただの式神と思っていた。真帆良に侵入してくる者は総じて式神を  
呼び寄せてそれを操り戦う戦法を主にしていたからだ。

当然、呪符から出てきた2体をもただの式神とってしまった。  
・・・しかしその結果、一瞬でほとんどの人間が行動不能になっ  
てしまつたという事態に陥ってしまった。

あの男が呼び寄せた2体は、今僕の目の前に居る風神と、対になる存在とされている雷神だった。

風神と同じくらいの体躯、逆立った髪に鬼の形相、太鼓の連なった輪を背中につけており、まさしく風神雷神図の通りの姿だった。

当然、僕らもただ見ていたわけではない。この2体が出てきた瞬間、全員が攻撃を仕掛けた。ある者は魔法を、ある者は己の武器を、現れた2体に向けて詠唱し、撃ち、切りつけた。

辺りは一面、魔法の影響で煙に覆われた。その煙で敵の姿は見えなくなってしまうが、全員の全力の攻撃を受ければ、さすがに巨大とはいえ一溜まりもないと考え、皆は警戒を解いてしまった。・・

・その瞬間。

2体の居たであろう場所から、激しい閃光が僕らを襲う。

今はもう日付も変わっている深夜だ。当然周りは暗く、明かりといえば街灯の灯りのみとなっていた。そんな中で急に激しい光を受けてしまえば、開ききった瞳孔の所為で目がくらんでしまうだろう。

僕は咄嗟に目を閉じ、腕で顔を隠したがそれでも少し遅かった。全く目が見えないわけではないが、目にカーテンがかかったようにぼやけてしまう。

そのぼやけてしまった視界で、僕は周りを見渡す。

やはりあの閃光を完全に防いだ者はいなかったようで、ほとんどの人が目を押さえている。・・・回復にはしばらくかかるだろう。

「少しでも目の見える人は周りの人の手助けをお願いします!!」

それと誰か学園長に連絡を

僕は周りに指示を出し、体勢を立て直そうとする。・・・しかし、

僕の指示はこちらに向かって叩きつけられた腕によって遮られてしまった。

僕は咄嗟に回避する。しかし、僕の体を巨大な腕ではない『何か』によって吹き飛ばされてしまった。そして、ぼやける目から見えた

のは僕らの攻撃を受けても傷一つなくそこに立っている、あの2体の姿があつた……。

……そのまま僕はその内の1体、風神の攻撃を受け、皆の所からどンドン離されてしまった。

こいつの攻撃は全てが肉弾戦なので攻撃その物を避ける事は容易いが……攻撃と共に襲ってくる見えない壁といつてもいい暴風が厄介だつた。

その風は敵の攻撃に合わせて襲ってくる事もあれば、敵がこちらを窺っていて動かない時でも急に襲ってくる時がある。

その為僕は敵の攻撃はかなり距離を取って避けるようにしているのだが……それでも攻撃のタイミングが掴めず、徐々に追い詰められてしまった。

……しかしこの強さ、普通の式神とは思えない。

僕は叩きこまれた塀から立ち上がり、ここから10mほどの所でこちらを窺っている風神を観察する。

見た目はまさに風神だが……風神のわけがない……。風神とは妖怪ではない。神の一種だ。とても人間に使役できるモノではない。僕はその考えを頭から振りきる。今はそれより、目の前のこいつを何とかしなければ。

あの男……禪と名乗ったアイツは恐らく陰陽術師で間違いないだろう。

陰陽術師の特徴は、そのほとんどが呪符を使用して術を使うという所だろう。特に彼らは呪符を利用して式神を作り上げ、それを己の配下として使役することも有名である。しかし目の前のこいつは、とても式神とは思えない。

……通常、式神とは位の低いモノしか呼び出せないものなのだ。

当然、そこまで強いモノではない。その為、陰陽術師は式神を大量に呼び寄せ、それを使役している。つまり質より量の存在なのだ。しかしこいつは・・・その通常の式神とは別格の強さを持っている。その疑問が、僕をさらに混乱させる。

早くこいつをどうにかして、皆の所に戻らなければいけないのに・・・  
。。  
そしてもう一つ、不可解な事がある。

今僕が突っ込んだこの塀。これは普通の民家の塀だが、当然当たった時に衝撃音が周りに響いた。それも相当大きな。

普通なら、寝ていたとしても一発で叩き起こされるような音だったはず。しかしこの民家から明かりが付く事も無く、静寂を保っている。

・・・まるで、誰も居ないように。

「はっはっはー！ 苦戦しとるようやねー タカミチはん？」

そんな時、上空からあの男の声が響く。

上空を見てみればあの男が浮かび、にやけながらこちらを見ていた。あいつがここに居るといふ事は・・・皆は・・・。

「・・・他の皆はどうした？」

「おっほ！ 怖い怖い！ そんな睨まんといてーな まだ殺ってへんがな！・・・まだ、な」

禅はこちらの問いにけらけらと笑いながら答える。その顔は邪悪な笑みで染まっている。

・・・やっぱりこいつはまともじゃないな。あんな顔をする奴は今までも何人か見てきたが、その全員が殺人鬼だったり狂人だったりと、まともな奴は一人もいなかった。

禅はその邪悪な笑みを絶やさぬまま、空中でふわふわと上下する。

「ワイも無暗に殺したりはせーへんよ　ただ殺すだけじゃもつたないんでな」

「・・・もつたない、だと？」

「どう言う事だ・・・それにこの誰もいない空間は・・・」

「おっ？　その顔はよく分かってない顔やね　ほんなら！説明しましょか！」

禅は嬉しそうに両手を叩くと、上空からゆっくりと降りてきて地面に降り立つ。

「・・・そして、その後ろに今まで俺に攻撃してきた風神が控える。」

「まずはこの『場所』から！　もう分かっていると是想つんやけど、ここに誰も居ない事は知ってまんか？」

「そう、それだ。激しい戦闘をしても誰も気付かない・・・というか居ないこの空間。まさかとは思いが・・・ここは・・・」

「あんたの予想通りや　ここは別の世界・・・簡単にいえばちよつと特殊な結界の中つてとこやな」

「・・・まさかとは思ったけど・・・本当にそうだとはね・・・という事はここは・・・」

「その通り！　ワイが現れた時にあの地点から半径約200mくらいの土地を『コピー』して、そこにお前らを転移させたんや　さすがに一般人に魔法バレするわけにはいかなからなあ、ワイでもそれくらいの常識は持つとるんでな」

「・・・何て奴だ。魔法使い30人を気付かれずに転移させたという

のか・・・しかも限定的とはいえ現実世界となんら変わらない仮想空間を構築するなんて・・・。

ここが異空間だとしたら恐らく通信も遮断されているだろう。という事は増援は望めない・・・。なら、皆をどうにかしなければ。何故かは知らないがこの男はまだ皆を殺していないらしい・・・。何故だ？

「・・・目的は何だ？　そして、その後ろの化物は・・・『風神』は一体何だ？」

まずはこの男の真意を探る。・・・それに時間をかければ皆が復活するかもしれない。

禅はこちらの問いに嬉しそうに笑うと、扇子をパンツと広げ自分を扇ぐ。

「目的・・・かいな・・・まあ詳しい事は言えんけど、簡単に言えば真帆良の戦力調査と・・・こちらの戦力強化やね」

「戦力強化？」

戦力調査は分かる。今までの侵入者も偵察という名の戦力調査が非常に多かったのだ。

しかし戦力強化・・・？　ここは奴にとって敵地だ。そこで戦力強化とは一体・・・？

「まあ分からんわな。　じゃあヒント出そか！　何でワイが、まだあんさんの仲間を殺してないのでしょ〜〜か？」

・・・確かに、こいつは最初に言っていた。僕たちを殺すと・・・でもまだ殺していない・・・という事は殺す前に何かをしなければいけない・・・？

一体何を・・・

「ぶつぶー 時間切れ〜！ 正解は・・・『材料』にする為でした」

奴はけらけらと笑う。・・・材料？

そこで、僕は以前受けた仕事の事を思い出した。

僕は魔法使いの団体に所属し、様々な仕事を請け負っている。その中でも比較的新しい仕事だった『あの事』を思い出した。

あれは南米の田舎にある村だった・・・その村で、村人の怪死が多発していたとの報告を受けた。ただの怪死なら僕たち魔法使いの定番ではないのだが、報告でおかしな事が上がってきた。

・・・曰く、殺された村人は・・・人形に殺されたと・・・。

魔法使いには『人形使い（ドールマスター）』という技術を扱う者が居る。その者は文字通り人形を操りそれを使役する事が出来る。

僕たちは、この村の怪死事件は『人形使い』の仕業と判断し、僕が出向くことになった。

・・・結果的に言えば、その事件は確かに魔法使いが起こした事件だった。しかし、それは『人形使い』なんて生易しい物ではなかった・・・。

そこに居たのは、殺された村人の人格を持った人形だった・・・。母親の人格を持った人形が泣きながら息子を殺していた・・・。婚約者の人形が、悲痛な叫びを上げながら恋人を殺していた・・・。そして、それを操る一人の男・・・。

・・・気が付くと、僕はその男を殺していた。

本来なら生かしたまま拘束しなければいけないのだが、そんな事は出来なかった。

そして僕は思い出したのだ・・・その男の言っていた言葉を・・・。

『材料に・・・しただけだ・・・』

「材料って・・・まさか・・・」

「まあ想像通りや・・・あんさんらは、ワイらの組織の人形にさせてもらおうと思てな・・・人形にするにや、殺す前にやらなきやいけん作業があつてな。だからまだ殺してないんよ」

それを聞いた途端、僕は奴に向けて居合い拳を放つ。・・・しかし当たる瞬間、後ろに控えている風神がその巨大な手を禪の前に盾のようにして防ぐ。

・・・こいつだけは、ここで殺さなければ・・・。

「おっほ！ せっかちやなあ！ まあいいわ。これがあんさんの質問の一つ目の答え、ワイの目的や。それで、もう一つあったなあ。後ろの風坊の事やったっけ？」

奴は何事も無かったようにこちらに話しかけてくる。

「あんさん、こいつらがただの式神とちゃう事は気付いてまんない？」

僕は頷く。正直、こんな強さを持った式神が居るとは思えないのだ。

「まあそうやるなあ。こんな強さの式神が居るとは思わんなあ普通は。まあそれを説明するにやあ式神の仕組みから説明せにやあな。ちよいと長くなるけど勘弁してな」

禪はそう言つと懐からキセルを取りだし、葉を詰めて火を付けた。それをゆっくりと吸い込み、紫煙を吐きだすとその口を開いた。

「式神つちゆうのはな、呪符を肉体として化生なもんを憑依させる・  
・いわゆる降霊術の一種なんや。その為、呼び出されたもんは倒  
されても死ぬ事は無い・・・実体じゃないからなあ。ただ元の所に  
戻るだけや。この世でもあの世でもない所になあ・・・」

そう、そこまでは僕も知っている。かつて、『あの人達』と一緒に  
居た時に、一緒に居た剣士から聞いた事がある。

・・・しかしあの2体にはこの常識外の何かがあるという事か・・・

「そんでな、その肉体は唯の呪符なわけやから当然肉体の受け入れ  
られる限界つちゆうもんがある。強力な式神が居ないんはそれが  
理由やね。ただの呪符じゃあ弱いバケモンしか受け入れられんちゆ  
う事や。」

そこで、ここからが重要や。 あんさんも戦い方は独特やけど一応  
西洋魔術師なんやろ？ そんなら、あつちにはいわゆる・・・悪魔  
を召喚して使役する術があるのは知つとるな？」

悪魔召喚・・・西洋魔術にある悪魔召喚は確かにあるが・・・あれ  
はむしろ別物と言っていいだろう。

あれは悪魔と直接契約をして、決して軽くはない対価を払わなけれ  
ば成立しない・・・使役というよりは契約に従っているだけだ。

確かに、この世にもう一つの肉体を作ってこつちに来るため、特別  
な方法で無いと殺す事が出来ないのは一緒だが・・・。

「ワイが使ったのはその応用みたいなもんや。こつちの式神はい  
わゆる質より量・・・そしてあつちの悪魔召喚は量より質・・・こ  
こまで言えば分かるやろ？」



笑顔を絶やさぬまま、こちらに話しかけてくる。そして風神は奴の後ろで不気味に佇んでいる。

「少し補足しとくとな？ こいつらの肉体に使ったのも呪符やない。さつきも言った通り呪符の肉体じゃ神の魂は受け入れられないんや。つまり、最初にあんさんらに投げつけた呪符は召喚符やない、転移符や」

「……つまり、別の所からこいつらの肉体を転移させて、そこに風神・雷神の魂を憑依させたという事か……」

しかし、それでも分からない事がある。こいつらは西洋魔術師と組んだと言ったが、だとしてもどうやって悪魔召喚の技術を貰ったのか……？

悪魔召喚術は魔法界では禁術中の禁術。邪法の極みとも言える。悪魔召喚の技術を一欠けらでも知ってしまったら、政府より賞金首付きで指名手配されてしまう。

- ・ ……そんな技術を西洋魔術師がおいそれと教えるとは思えない
- ・ ……一体何を対価にしてそれを得たのか……

「ふっふっふ……やっぱり納得いかんようやね。ワイらが何故悪魔召喚の秘術を知っているか……」

そいはな？ ワイらもそれなりの秘術を差し出したからよ。ワイらの式神は質より量……決定打に欠ける術や……そしてあいつらの悪魔召喚術は量より質……一度召喚してしまえば強力だが、それにはかなりのリスクが伴う上にそんなに大量には召喚できへん……

もどかしいやねえ〜お互いに欠けてるもんがお互いの足りてるもんやからな。

- ・ ……じゃあ、交換してしまえばいいと思てな」

・・・そう言う事か。陰陽術と西洋魔術・・・どちらかがどちらかを頼るわけではなく、お互いに協力する・・・まさしく・・・『連合』。

「そう言う事や。ワイらは式神のいろはを教える。奴らはワイらに悪魔召喚術を教える。これでお互い助かるつちゅー寸法や。ちなみに日本陰陽連合ってのは日本での呼び名やから、向こうではちやーんと向こうの呼び名があるさかい、勘違いせんといてな？」

・・・つまり・・・目の前に居るあいつは・・・本物の風の神・・・『風神』というわけか・・・。  
神に・・・勝てるのか・・・？

そしてその瞬間、やつの後ろから巨大な足音が響いてくる・・・ドシン・・・ドシン・・・と・・・。  
それは、まだ結構な距離があるにもかかわらず、ここからでもうっすらと影が見える・・・風神と同じくらいの大きさの影が・・・。

「おゝい 主さんよゝい！ 捕まえたでー」

そして響く野太い大声。そして最初に一瞬だけ見た雷神の姿が見えてきた。その両手に『何か』を持って・・・。

「雷坊！遅いわ！ 小娘2匹に何手間取っとんねん！」  
「そなこと言っただって、こいつらすばしっこいねん！ 傷つけるなちゅー命令やったし・・・」

そう言って雷神は『ソレ』を揺らす・・・ここからだとよく見えな  
いが・・・人大の何かを両手に一つずつ・・・持っている。

「・・・・・・・・・・油断するからだ」

ここで、今までずっと、禪の後ろに佇んでいた風神が初めて喋った。  
「・・やはりこいつらも意思があるらしい。悪魔にも人格があるらしいからこいつらにあつても不思議ではないのだが・・」。

「まったく・・まあいいわ。さてタカミチはん？ あんたの質問には答えたで？そんなら、再開しようかあ？」

そして、雷神がようやく風神の隣まで来る。・・そこで、奴の持っている物が分かった。

「・・右手に・・桜咲君・・左手に・・龍宮君・・」。

僕は、奴に突つ込む。瞬時に魔力と気を合成、狙うは・・雷神の腹！！！！！！

『豪殺・居合い拳、連激！！！！』

一気に5連激まで叩きこむ、両手に握られている2人には当てないように。

しかし、雷神に当たる瞬間、風神が雷神の前に躍り出る。そして全てが風神に防がれる・・

「はっはー！ 気が早いなあ！ まだ開始のゴングは鳴らしてへんでえ？」

「貴様！！ その娘らをどうするつもりだ!？」

なんであの2人が・・!？ こいつらの目的じゃまだ危害は加えないのでは・・

禪は懐から何枚か呪符を取りだしながら僕に言い放つ。

「ああ・・・この娘っ子らな？　ちよつと貰つて行こうと思てな？  
半魔に半妖・・・しかも白鳥の半妖つて珍しいやん？　ワイらの  
組織の上の人がな？　こういった輩を集めてんねん。だからお土産  
にしようと思てな」

・・・土産・・・だと？

「・・・その子等は・・・僕の生徒だ・・・」  
「へえ〜　そうなんかいな？」

奴は呪符を何枚か選ぶように取り分けながら、こちらに言う。無慈悲に・・・邪悪に

「だ・か・ら？」

僕は体にいつもよりも多くの力を巡らす。・・・限界を超えた力に、  
体が悲鳴を上げる。・・・だけど関係無い

「その子達は・・・渡さない」

「へえ〜？　そう。それはそれは・・・でも、あんたにや無理だ  
と思うで〜。あんたにやこいつらは倒せん・・・諦めなあ」

僕は両手に力を込める。もういつでも居合い拳を放てる。

一步を踏み出す・・・勝てなくても、あの子たちだけは  
その時だった、僕の後ろから声が聞こえたのは。

「なあ・・・あんた」

その声に僕は振り向く。正直、目の前の禅に気を取られて今まで気  
付かなかった。

そして・・・そこには・・・鬼が居た・・・。

「その2人な・・・俺を助けてくれたんだよ・・・」

そこに、数十分前に僕と戦った『彼』が居た。

「バケモノの俺を・・・匿ってくれたんだよ・・・」

それは、白い・・・とても白い夜叉だった・・・。

「だから・・・だからな・・・？」

そして・・・『彼』は・・・

「今度はおれがたスケる」

神をも殺す『バケモノ』だった・・・。

## 5話（後書き）

展開が遅いので量を多くしました  
・・・それも遅いのは何故だ・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6838p/>

---

異形の守り人

2011年1月10日17時22分発行